

P-3

日本語学会第 155 回大会（立命館大学）2017.11.26

日本語を母語として獲得する幼児の TP について：動詞語幹・活用語尾・主格に注目して*

團迫雅彦（九州大学）

dansako@lit.kyushu-u.ac.jp / dansako@hotmail.com

本研究は、動詞に接続する諸形式や主格助詞（ガ格）に注目し、日本語を母語として獲得する幼児がどのように TP（時制句）を投射するかについて考察する。具体的には、以下の三段階を経て大人と同様の TP 投射が発現すると主張する。すなわち、幼児は (i) 動詞語幹と活用語尾が分化しておらず、どの項に対しても主格を付与しない段階、(ii) 動詞語幹と活用語尾が分化するようになるが、**theme** 項にのみ主格を付す段階、(iii) **agent** 項にも主格を付す段階を経る。

従来の日本語の TP 獲得に関する研究では、時制辞を伴う発話が見られた段階が TP の発現であるとみなしたり（Nakayama 1996）、動詞を用いている文の場合、時制辞が含まれていない文は発達を通して観察されないため、T を欠く構造にはなっていないとされたり（Sano 1995）、時制辞の方が主格助詞よりも早い段階で発話に現れるため、少なくとも主格助詞が現れた段階は TP の発現とみなせると指摘されてきた（Matsuoka 1999）。しかし、日本語の動詞は語幹も活用語尾も拘束形態素であり、時制辞が現れることがそのまま T を投射していることを示すかどうかは疑問が残る。また、主格助詞についても初期段階では、**theme** 項のみに標示されるとする報告もあり（鈴木 2007）、TP の特性が大人とは異なる可能を示唆されている。このように、幼児は確かに動詞に時制辞を接続させた形式を早い段階から発話してはいるものの、大人と同様の TP が投射されているかは必ずしも明らかではないように思われる。

そこで、本研究では、TP の投射のためには動詞語幹と時制辞が別の形態素であり、それぞれが別の投射から成ることを示す必要があると考え、具体的には、以下の 3 点を検討する。(1) 動詞語幹と時制辞が接続する形式において、（異なり語数が）生産的に増える時期はどの時期なのか。例えば「あった」と「来た」はタ形が接続されているが、異なる動詞語幹に接続されているため、異なり語数は 2 と計算する。(2) ある任意の動詞に複数の活用形が見られるのはどの時期なのか。例えば「出る」と「出た」は同じ動詞語幹であるが、二つ以上の活用形が見られる。このような複数の活用が見られる動詞がどの程度現れるかを検討する。(3) 主格助詞が接続する名詞の意味役割について、**theme** 項ならびに **agent** 項が現れるのは上記の(1)と(2)と対照させ、どの時期なのかを特定する。本研究では、CHILDES データベース（MacWhinney 2000）における Aki コーパス（Miyata 1995）を用い、幼児 1 名（Aki）の 1 歳 5 ヶ月から 2 歳 5 ヶ月までの自然発話の中から動詞文と主格助詞をそれぞれ取り出した。周囲の大人の発話の模倣と思われる文や不明瞭な文については、分析から除外した。その結果を上記のうち、(1)と(2)について、それぞれ図 1 と図 2 に示した。X 軸は年齢、Y 軸は累積数を表している。図 1 と図 2 の共通点は、1 歳 5 ヶ月から 2 歳 0 ヶ月までは累積数がほぼ横ばいで 0 に近いが、2 歳 1 ヶ月以降は徐々に数が増え始め、特に 2 歳 3 ヶ月の段階で大幅に伸びていることが分かる。このことから少なくともこの時期には動詞語幹と活用語尾が別の形態素であると認識され、多様な組み合わせを産出できるようになっていると考えられる。また、(3)の主格助詞については Aki の場合も、2 歳 0 ヶ月から産出が見られるが、鈴木(2007)の幼児と同様に、最初は **theme** 項のみに標示されており、**agent** 項に付されるようになるのは 2 歳 4 ヶ月の段階に入っ

* 本研究は JSPS 科研費 16K16826（若手研究（B）『主語の格標示に関する統語理論の言語獲得からの実証的研究：熊本方言を対象にして』、研究代表者：團迫雅彦）と JSPS 科研費 15K02606（基盤研究（C）『フェーズ理論とカートグラフィ分析に基づく節構造の実証的研究—周辺現象から核心へ—』、研究代表者：西岡宣明）の助成を受けている。

てからであった。この時期は、(1)と(2)の動詞語幹と活用語尾が別の形態素であると認識されるようになった後の段階である。以上の観察から、本研究では、幼児は (i) 動詞語幹と活用語尾が分化しておらず、どの項に対しても主格を付与しない段階 (Aki では 1 歳 5 ヶ月から 2 歳 0 ヶ月までの段階が相当する), (ii) 動詞語幹と活用語尾が分化するようになるが、**theme** 項にのみ主格を付す段階 (Aki では 2 歳 1 ヶ月から 2 歳 3 ヶ月までの段階が相当する), (iii) **agent** 項にも主格を付す段階 (Aki では 2 歳 4 ヶ月から 2 歳 5 ヶ月までの段階が相当する) を経ると主張する。

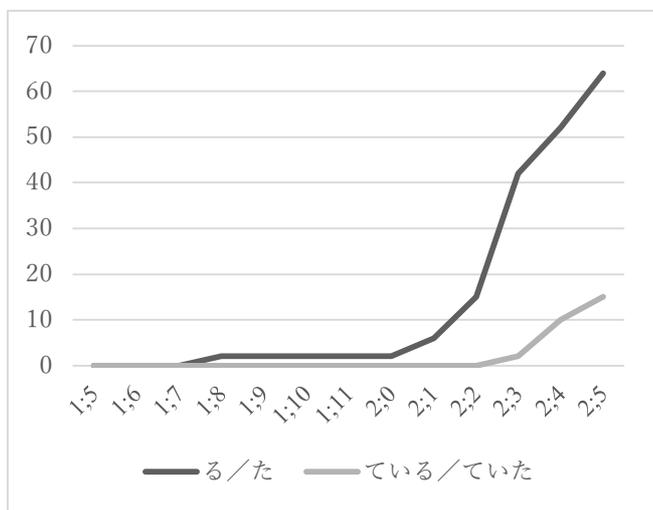


図 1. 「V+X」の異なり語数の累積数

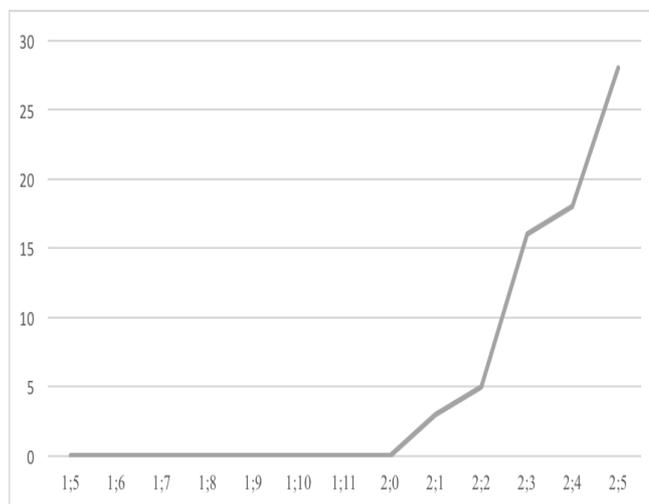


図 2. 二つ以上の活用形が見られる動詞の累積数

【参照文献】

MacWhinney, Brian (2000) *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Matsuoka, K. (1999) "Studies of the Acquisition of Syntax and their Implications for Syntactic Theory," 『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究 研究報告書Ⅱ』 331-348.

Miyata, S. (1995) "The Aki corpus -Longitudinal speech data of a Japanese boy aged 1.6-2.12-," *Bulletin of Aichi Shukutoku Junior College* 34, 183-191.

Murasugi, K., and Fuji, C. (2009) "Root Infinitives in Japanese and Late Acquisition of Head-Movement," A Supplement to the Proceedings of the 33rd Boston University Conference on Language Development, ed. Jane Chandlee, Michelle Franchini, Sandy Lord, and Marion Rheiner. (<http://www.bu.edu/linguistics/APPLIED/BUCLD/supp33.html>)

Nakayama, M. (1996) *Acquisition of Japanese Empty Categories*, Tokyo: Kurosio Publishers.

Sano, T. (1995) *Roots in Language Acquisition: A Comparative Study of Japanese and European Languages*, doctoral dissertation, University of California Los Angeles.

鈴木猛(2007)「日本語の獲得過程で現れる主語標識の分裂」『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅰ』(58), 45-59.